



# 「努力 報われる」原動力に

## 神奈川県立小田原高校

③

ヤマトホールディングス相談役 **瀬戸薫さん** 1965年度卒



ヤマト運輸で他社に先駆け「クール宅急便」を開発した瀬戸薫さん(69)は1965年度卒、現ヤマトホールディングス相談役。神奈川県立小田原高校時代、卓球部で練習に明け暮れ、目標であった関東大会出場も果たした。その経験から「努力は報われる」と学び、仕事の上でも世の中になくもないものを生み出す原動力になったと振り返る。

【賀川智子】

小田原高校は父や兄が卒業生でした。校舎の上にある貯水池が桜の名所で、花見に家族で訪れるなど小さい頃からなじみがあり、志望は自然な流れでした。出身の小田原市立白山中では卓球部で地区のトップ選手。小田高進学が決まった後に、当時卓球部顧問をしていた天利俊三先生に誘われ、まだ入学前でしたが3月の合宿に特別に参加しました。通学路の百段坂をウサギ跳びやダッシュで何往復もして、きつかった。「これが高校生の部活かなんて、洗礼を受けました。入学後も朝から夕方まで卓球漬けの毎日でした。

せと・かおる 1947年、神奈川県小田原市生まれ。中央大法学部卒業後、70年大和運輸入社。ヤマトホールディングス代表取締役社長、同会長を経て現在は相談役。座右の銘は「苟(いや)しくも仁に志せば悪無きなり」。今年から東京在住小田原高校OBの会「小田中・小田高東京会」会長を務める。

高)でした。2年の夏、団体戦で県予選の決勝まで進み、三浦と対戦が決まりました。2-1で小田原があと1人勝てば優勝、という場面で自分の番がまわってきました。相手は過去に3回対戦して一度も勝っていない強敵。1セットずつ取る接戦の後、最後は相手が返した

## 通学の難所「百段坂」

小田原高校は「八幡山」と呼ばれる小高い丘の上にあります。小田原駅西口から正門に向かう途中に通称「百段坂」と呼ばれる石畳の131段の階段坂がある。1913(大正2)年に、現在の小田原駅にあ

## 部活動でトレーニングも



小田原駅西口から高校の正門に向かう途中に百段坂がある。坂の上からは相模湾が見渡せる—小田原市城山で

った校舎を八幡山に移転する新築工事が始まった。移転時の回顧談に「生徒たちが登校しやすいように、裏山の坂道を2歩1段の「百段坂」にしたのも、生徒と職員の奉仕だった」とある。だが今

ではなく、「薄暗くジメジメとした道は、急に傾斜の度を増した急坂になり、自然の石がゴロゴロと不規則に置かれた石段になっていく」という。部活動のトレーニングの場でもあった坂は、青春の汗が染み込む場所でもあったようだ。

球を回り込んでドライブを駆け打ち込んだのが、相手の懐深く入ってゲームセット。チームの夢がかなった瞬間でした。「努力すれば報われるんだ」ということを実感しました。その時の興奮は今でも鮮明に覚えています。

いく」という自立心がだんだんできあがったのです。中央大卒業後、親戚が勤務していた縁で大和運輸(当時)に入社しました。宅急便課長としてクール宅急便の開発に携わり、当時、世になかった「温度管理をしながら配送する」仕組みを作りましたが、多額の先行投資を回収できるか、重圧がありました。

88年の全国展開後、3年間は社内で「クール宅急便があるからうちの業績が厳しいんだ」と針のむしる状態でした。それでも、開発にあたり全国の専門家を回り、新鮮な魚のうまみを逃

さずに低コストで輸送できる最高のサービスを作ったという自信がありました。その後売り上げは順調に伸び、十数年間は競合他社の追随がなく当社が市場を独占しました。小田高時代に学んだ「限界までやれば道は開ける」ということが、世の中にな

### 卒業生「私の思い出」募集

神奈川県立小田原高(旧制含む)卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で、学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。卒業年度、氏名、年齢、職業、住所、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100-8051、毎日新聞地方部首都圏版「母校」係(住所不要)へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は、毎日新聞やニュースサイトで紹介することがあります。新聞掲載の場合は記念品を差し上げます。